

漢文学習の意欲を高めるための指導の工夫

- 言語感覚を磨き、読む力を伸ばすために -

内 木 ユ リ ヤ¹

高校生の古典離れの傾向に対して、古典の現代的な価値を理解させ、古典に親しむ態度や能力を育成することが求められている。なかでも日本文化に影響を与えてきた漢文の重要性を考え、漢文学習の意欲を高める指導の在り方を追究することとした。そこで、漢文学習の意欲を高めるため、漢文が生徒の生活と深くかかわっていることを実感させた上で、漢字や語句の知識を深め、更に漢文を通して人間や社会について考えさせる指導の工夫を図った。

はじめに

高等学校学習指導要領における国語科の目標は、大きく二つの部分からなる。その後段には「思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる」とあり、特に言語文化に関しては、「高等学校学習指導要領解説」(文部省 2000)に、古典から現代に至る各時代の文学をはじめ様々な言語文化に対して広くかつ深い関心を持つことが、高等学校における目標とされると、説明されている。この目標を受けた「国語総合」では、「読むこと」の指導事項として、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと」、「様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること」とあり、また、古典と近代以降の文章を扱う割合については、おおむね同等を目安としている。

ところが、平成17年度高等学校教育課程実施状況調査では、古典を読み味わう能力や古典の言語事項などに課題があることが指摘された。各教科の勉強が好きかと尋ねた質問紙調査においても、古文・漢文を好きだと回答した生徒は、他の教科・科目に比べて少ない。

実際教室においても、生徒が、古典、特に漢文の授業にあまり意欲的ではないことに課題を感じている。古典学習の中で日本文化に根ざした言葉を学ぶということを考えると、古典を敬遠することは、高校生の言語感覚とも無関係ではないと考える。高校生が言葉を知らないという指摘は、よく聞くところである。

このような現状を踏まえて、本研究に取り組んだ。

研究の内容

1 研究テーマの設定から研究仮説を立てるまで

1 県立小田原高等学校
研修分野(国語)

(1)テーマ設定の理由

中国から伝来した漢字によって日本語を書き表す文字を手に入れて以来、日本の文化は漢文の影響を受けて発展してきた。言語について考えても、現代の日本語の中には、漢文に由来する多くの言葉がある。現代日本語につながる古典としての漢文を学ぶことは、生徒の言語感覚を磨き、語彙を豊かにしていくためにも大きな意味があると考えられる。また、自然や人生、社会についての考え方など、近代日本を作った思想や感性を支えた漢文を学ぶことは、日本文化に対する理解を深める一助となるとともに、現代社会を生きる上でのものの見方、考え方を広くすることにもつながる。

しかし、教室で接する生徒からは、しばしば、「漢文は何の役にも立たないから必要ない」という発言を聞く。そこで、漢文学習の重要性を踏まえて、漢文学習の意欲を高めるための指導の工夫というテーマを設定した。

(2)研究テーマから研究仮説へ

ア 学習意欲について

市川伸一は、学習に対する動機を「学習の重要性」と「学習の功利性」という規準で分類した「学習動機の二要因モデル」を提示する中で、現代社会においては「実用志向」の動機をもっと重視するべきであると提言する。「実用志向」の動機とは、将来の仕事や、社会で生活していく上で役立つから勉強するという考え方であるが、ここで述べられている「実用」とは、就職や進学という具体的、現実的なことだけではなく、「何か自分の可能性を広げるものになる」というところまで拡大して考えられている。さらに、「学習内容自体が大切なことなんだという実感を、子ども自身が持てる」ことが必要だと述べている(市川 2001)。

漢文の場合も、漢文で学ぶ漢字や語彙は、社会に出て生活していく上で役に立つと気付くことで学習意欲につながることができる。さらに、漢文学習によってものの見方、感じ方、考え方を広げることが、自分の可能性を広げることにつながると理解できれば、漢文学習の大切さを認識し、「実用志向」の動機を持つ

ことができると思った。

イ 学習意欲と学習活動、学習効果の関係

意欲を持って学習に取り組んでも、そこで適切な学習活動が行われなければ学習効果は上がらない。学習効果には、学習活動の結果得られた成果、つまり、成績や能力の向上だけではなく、成果が得られたことに伴う心理的満足感、あるいは成果が得られなかったことによる不満感も含まれ、この学習効果が再び学習意欲に影響を与える。例えば、せっかく勉強しても、文章がよく分からなかったり、思うように成績が上がらなかったりすると、十分な満足感が得られず、意欲を減退させることになってしまう。

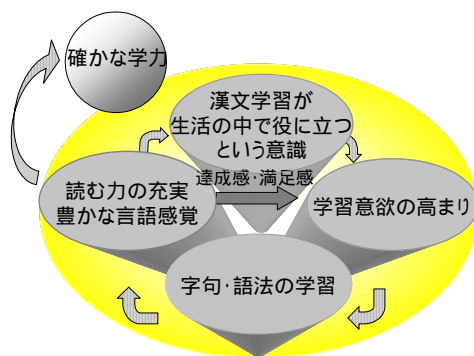
そこで、漢文学習に意欲を持たせた上で、文章を読むための基礎・基本の知識としての字句・語法の指導をする必要があると考える。学習した字句・語法の知識を活用して文章を理解することができ、満足感が得られれば、その満足感は、再び学習意欲を高め、学習を継続的なものにすることができる。

(3) 研究の仮説

そこで、次のように研究の仮説を立てた。

漢文で学ぶ語句や表現が現代の生活に生きていることを知ることで、漢文学習の意欲を高めることができる。その上で、字句や語法といった基礎・基本の学習を十分に行えば、漢文を読み味わう力を伸ばし、言語感覚を豊かにすることができるだろう。

漢文は身近なもので、これを学習することは役に立つという意識から、学習意欲を高め、学習に取り組み、読む力が向上する。読む力が向上し、漢文を深く読み味わうことによって、満足感を得るとともに、ものの見方、考え方を広げるという意味において、漢文学習が自分のためになるという意識を持つことができる。このことが更に意欲を高め、学習が継続されていく。この連鎖を生み出すことで、学習内容や、読む力をより高度なものにし、確かな学力を育成することができると思った(第1図)。



第1図 研究構想図

2 研究の方法と内容

上記の仮説に基づき、具体的な教材と、それを使っ

た授業の組み立てを考え、実際の授業を通してその有効性について検証した。

(1) 指導の工夫

学習意欲を高めるために最も基本的なことは、生徒が、漢文を自分の生活につながるものだと意識し、漢文学習の意義を理解することができることであると考えた。このことに留意して、次のア～エの4点について工夫をした。

漢文を生徒の身近なものとし、有用性を感じさせる最初の手立てとして、言葉の学習という面に注目し、ア「導入教材」と、ウ「漢和辞典を活用する指導」を考えた。次に、漢文を読み味わうことから学ぶ事柄もまた、生徒にとって、ものの見方、考え方を広げるという意味でためになることだが、この有用性に気付くためにも読む力が求められる。このような読む力を伸ばす学習の手立てとして、イ「句形カード」を考えた。また、文章を読み味わい、人間や社会について考える手立てとして、エ「読解ワークシート」を作成した。ア「導入教材」

漢文で学習する漢字や語句が生徒の日常生活とつながっていること、漢文で学習する知識が漢文以外の国語や他教科の学習、日常生活においても有用であることを認識させることをねらって、導入教材として「故事成語プリント」を作成した。

新聞記事や雑誌の見出しから故事成語を使った文を集めたもので、故事成語の意味を確認させ、故事成語が使われる理由を考えさせる。取り上げる故事成語は、生徒にとって身近な話題の中に使われている言葉や、授業で扱う教材と関連のある言葉を選ぶ。

イ 語法指導と「句形カード」

英語や古文と同様に、漢文を読むためにも語句や文法の知識が必要であるが、暗記するだけの文法学習はしばしば生徒の古典嫌いの原因となる。そこで、語法の指導については、できるだけ生徒自身が考えて理解していく学習とすることをねらい、文法書を活用し、句形の例文を比較して、その特徴に気付かせる指導を考えた。

漢文の勉強の仕方が分からないという生徒の発言をよく聞くが、このような生徒は、文章を読むために語句や文法を学習するという意識を明確に持つことができていると思われる。そのため、学習した文法事項が次の学習につながっていかないのである。そこで、語句や文法の学習内容を定着させ、次の学習に活用させていく手がかりとして、句形カードを作成した。

授業で学習した字句や句形について、文法書などを見て、改めて、意味や用法をカードに整理させるものである。字句や句形の基本的な形と意味の他に、用例として、授業で学習した教科書の文も抜き書きさせておく。用法や特徴については、自分で考えて重要だと思われることを記入するように指示をする。こうしたカー

ドの作成は授業の復習にもなり、また、自主的な文法学習にもなる。作られたカードは、自分の学習を具体的に実感する成果物にもなる。

ウ 漢和辞典の活用

古文や現代文と比べ、漢文の授業では、辞書を引く生徒は少ないと感じている。しかし、漢文もまた国語の学習であることを考えれば、辞書を引く活動は基本である。日常見慣れている漢字も、漢文の中では多様な使われ方をしている。改めて漢和辞典を調べてみると、漢字の字義や成り立ちなど学ぶことは多い。日常的な漢字や言葉に対する知識の幅を広げ、言葉に対する意識を高めるため、漢和辞典を活用した指導をする。

エ 「読解ワークシート」と読解指導

文章を読むために、語句や文法の学習が必要であることを理解させることで、文法学習に目的を持たせることができる。そこで、語句や文法の知識を踏まえて文章を読むということを意識的にさせるために、音読し、語法の学習を踏まえて現代語訳をし、話のあらましを理解するまでの段階と、情景や人物の心情を読み深める段階とに分けて授業を組み立てる（第2図）。

情景や人物の心情を読み深める学習では、意見発表や話し合いをさせる。そのためにはまず生徒一人ひとりが、自分の意見をまとめておく

ことが必要である。そこで、まず、生徒に自分の考えを書かせ、授業を通してその考えを深めさせることをねらいとして「読解ワークシート」を作成した。

情景や人物の心情、文章の主題などについて考えさせる課題を並べたプリントであるが、自分の考えを自分の言葉で書くことを促すために、記入欄を二つに分けた。まず、自分で考えて書く欄と、その後人の発表や説明を聞き、気が付いたことを記入する欄である。自分で考え、人の意見を聞き、もう一度自分の意見を見直し比較するという作業を意識的に行うことで、自分の考えを深めることができる。と考える。

さらに、授業の最後に、生徒同士の話し合いの中で、文章に対する理解を深めることを目的として、グループで話し合っって試験問題を作る活動を置く。

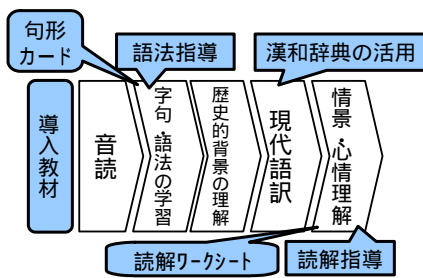
(2) 検証授業

上述の指導の有効性を検証するために授業を行った。

ア 検証授業の概要

対象 県立小田原高等学校 2年次 古典選択クラス
題材 項羽と劉邦「四面楚歌」（史記） 第一学習社 古典（漢文編）

授業の流れ(第2図参照)



第2図 授業の流れ

第1時～第3時(各90分)

- ・漢文の構造や語法について理解する。
- ・歴史的背景を踏まえて、現代語訳する。
- ・人物の心情について考える。

第4時(45分)

- ・班で話し合っって、試験問題を作る。

イ 授業の実際

「四面楚歌」を三つの部分に分け、部分ごとに、音読指導、字句や語法の指導を行い、必要に応じて歴史的背景の説明を加えながら、現代語訳をさせ、人物の心情について考えさせた。それぞれの段階で、第2図のように指導の工夫を図った。

生徒は、文法書もよく活用しており、板書を写すだけでなく、ノートやプリントへの自主的な書き込みも熱心に行っていた。

(ア) 導入教材「故事成語プリント」の利用

「故事成語プリント」は第1時の導入で使用した。

「四面楚歌」の本文に入る前に、プリントで取り上げた幾つかの故事成語は、これから学習する話の中から生まれてきたものであることを知らせておき、学習を進める中で、随時「あの故事成語はここから生まれている」という説明を加えていった。「背水の陣」や「捲土重来」などの故事成語について、辞書的な理解だけでなく、典拠となる本文や人物の心情を理解した上で意味を考えるように促した。

故事成語が使われる理由を尋ねると、「偉そうにできる」という答えが複数の生徒からあった。故事成語のような難しい言葉を知っていて使えるということは賞賛の対象になるという意識が生徒の中にあることが分かる。事後アンケートでも、授業で興味を持った点に「故事成語の意味や起源」と書いた生徒が複数いた。

(イ) 語法指導と「句形カード」の利用

「四面楚歌」には、疑問・反語や使役などの句形が出てくる。そこで、例えば、反語の句形について、文法書の例文を見比べて、反語の句形に共通する特徴や、疑問形との違いを考えさせ、発表させた上で、補足の説明を行った。

句形カードは、字句・語法の学習をしながらその場で書かせるのではなく、学習が一通り終わったところで記入させるが、今回は家庭学習とした。記入の内容を見ると、学習の受け止めや理解の程度を見ることができるので、提出させて添削指導を行った。最初は要領を得ない生徒も、添削指導によって、必要な事項を書き込むことができるようになり、授業で学習したこと以上に、参考書から自分で学んだことを書き込んだ自分なりの工夫をしたカードを作ってくる生徒や、授業で取り上げなかった句形についてもカードを作ってくる生徒もいた。

事前アンケートでは、漢文について勉強の仕方が分からないという生徒が少なからずいたが、事後アンケ

ートでは、「どうやって勉強してよいか分からなかったが、句形などを覚えていくことが大切と思った。」といった内容の記述をした生徒が複数いた。

(ウ)漢和辞典の活用

本文中の「忍・創・面」などの字について、日常どのような意味で使うかを考えさせた上で、漢和辞典を調べ、本文中の意味を確認させた。あわせて、漢字の原義や日常使われる熟語の意味なども確認させた。

初めは漢和辞典を引くことに面倒な表情をする生徒も多かったが、次第に抵抗感がなくなっていき、現代語訳するとき、自分からいろいろ調べる生徒も出てきた。休み時間に、自分の名前の漢字を調べてみて意味が分かったと話している生徒もいた。

(I)「読解ワークシート」の利用と読解指導

現代語訳をして話のあらましが分かったところで、「読解ワークシート」に記入させるが、自分の考えをまとめる時間を確保するために、今回は、自分の考えを自分の言葉で書くことを強調し、家庭学習とした。

事前アンケートでは、漢文の予習はしないと回答した生徒が62.0%（41人）いたが、事後アンケートで、家庭学習を行わなかったと回答した生徒は27.0%（17人）であり、生徒は熱心に取り組んでいた。記入の内容も評価できるものがあり、次の時間の授業ではいろいろな意見を聞くことができた。

記入欄を二つに分けたことで、授業を通して、最初に書いた自分の考えに対する説明や背景の補足、あるいは訂正といった内容を記入することができ、自分の意見をより明確にしたり、深めたりしている様子が見られた。また、話し合いの後に、「人生に対する考え方は、その人が今まで経験してきたことによって異なると思った。」と書いた生徒もいて、漢文を読み、人物について考えることから、「人間のありよう」へと考えが及んでいる様子が見られた。

試験問題を作る活動では、問題になりそうなところを指摘し合う中で、文章の理解が十分ではない生徒が、一つずつ教えてもらっている場面もあり、授業の振り返りにもなっていた。作問では、選択肢を考えることが難しかったようで、「人間はどういうときに笑うんだろう?」や「自嘲ってどういう感情?」などと、人物が置かれた状況や場面を、いろいろと具体的に想像しながら話し合いをしていた。

3 仮説の検証

(1)検証の手立て

検証の手立てとして、授業の前後に、生徒の意識の変化を見るためのアンケートと、読む力を見るための読解テストを実施した。また、授業の受け止め方を見るために、読解ワークシートを参考にした。

アンケートでは、まず、生徒の漢文学習に対する意識や意欲の状況を見るための質問をした。さらに、予

習の状況、辞書の所有・利用の状況、授業中の取組状況などについて尋ねた。

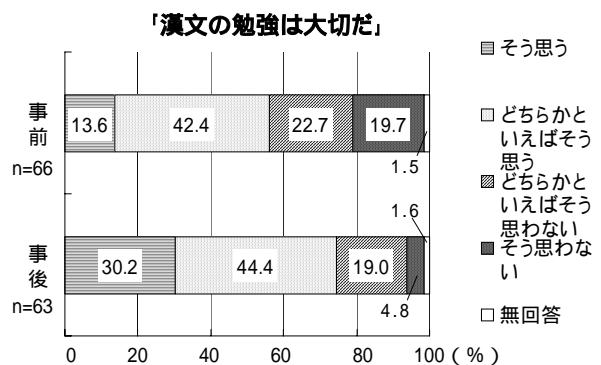
また、日常生活の中での言語に対する意識を見るために、「さんずい偏の付く字」と「四字熟語」を「制限時間内で思いつく限り書いてください」という質問をし、事後アンケートでは、併せて「言葉の決まりや言葉使い」、「知らない漢字や言葉」について、「今回の授業を通して自分の意識に変化があったかどうか」を尋ねた。

読解テストは、初見の漢文を10分程度で現代語訳するものである。

(2)漢文学習の意欲について

ア 漢文の勉強は大切だという理解

漢文学習の意欲を高めるためには、生徒の中の「漢文は役に立たないから必要ない」という意識を変えることが必要だと考えた。そこでこの意識の変化を見るために、「漢文の勉強は大切だと思うか」という質問をした。事後アンケートでは肯定的回答が74.6%になり、事前アンケートの数字56.0%に比べて増加している（第3図）。



第3図 漢文学習に対する意識の変化 1

第1表 漢文学習に対する意識の変化 2

肯定的回答をした生徒に理由を尋ねる（複数回答）

漢文の勉強が大切な理由	事前(%)n=37	事後(%)n=47
大学受験で必要	43.2	51.1
知識が広がり、教養が身に付く	51.4	42.6
漢字や言葉の知識がためになる	18.9	36.2
人間の生き方や思想を学ぶ	29.7	25.5
自分で古典を読む力を付ける	10.8	12.8
論理的な思考力が身につく	21.6	12.8
日本文化の理解に役立つ	8.1	10.6
その他	8.1	6.4

事後アンケートで、大切だと思う理由の1位は「大学受験で必要」（24人）であるが、この24人のうち12人は、他の理由も重複して回答している。そして、続く理由の3位に、事前アンケートでは5位の「漢字や言葉の知識がためになる」がきている（第1表）。自由記述欄にも「漢文をやることによってふだん何気なく使っている言葉の成り立ちが分かるところがよい」

など、漢字や言葉について学習したことに触れた記述が複数あり、漢文学習を自分の生活につながる言葉の学習として認識させることができたと考える。

イ 漢文の勉強が面白かったという体験

大切だという意識とは別に、「漢文の勉強は面白いと思うか」という質問をした。事後アンケートでは、一つの学習として興味が持てたかを確認するために、「史記の授業は面白かったか」という質問をしたところ、82.6%が肯定的回答をした。事前アンケートの回答は42.4%である。質問の仕方が変わっているのも単純に比較することはできないが、63人中52人が、一つの題材の授業を面白いと思う体験をしたといえる。

第2表 漢文学習に対する意識の変化3

肯定的回答をした生徒に理由を尋ねる (複数回答)

漢文(史記)の勉強が面白い理由	事前(%)n=28	事後(%)n=52
登場人物の生き方や考え方に興味がある	50.0	53.8
ストーリーが面白い	60.7	50.0
古代中国の文化や歴史的背景に興味がある	35.7	42.3
漢字や言葉の知識がためになる	14.3	25.0
訓読や現代語訳ができて充実感がある	28.6	17.3
言葉のリズムや漢文独特の表現に興味がある	28.6	7.7
受験で必要な知識を学ぶ	14.3	7.7
その他	3.6	5.8

面白かった理由は、「登場人物の生き方や考え方に興味が持てた」、「ストーリーが面白い」、「文化や歴史的背景に興味を持てた」と、事前アンケートと同じ項目が多いが(第2表)、特に人物の心情や生き方について考える学習が興味深かったことが、アンケートの自由記述からもうかがえる。

人物について考える学習は、読解ワークシートを利用して行ったが、何万人もの兵士を率いて戦い、敗北し自害した武将、項羽の運命を自分の上に置いて考えさせたところ、「(故郷に逃げ帰るか、死を選ぶかは)自分のことはよく分からない。死ぬのは怖い、帰ることもとても怖い。」と書いた生徒がいる。論理的ではないが、古代中国の武将の生き方を感覚的に追体験することができていると見られる。また、話題の若手ボクサーと比較して項羽の人物について考えた生徒もいて、時間や空間の隔たりを超えて、自分たちの生活につながるものとして、登場人物の心情を考えることができたと思える。これらのことが、学習内容への興味につながったと考える。事後アンケートでは、「一つ一つの言動や感情の意味を追求することが楽しかった」というような記述が多数見られた。

史記の勉強が面白かった理由について、もう一つ、事前アンケートでは14.3%(4人)しか回答しなかった「漢字や言葉の知識」に25.0%(13人)が回答していることは、本研究にとって重要な意味を持つと考える。

この理由は「登場人物」や「ストーリー」といった題材に左右される理由と異なり、漢文学習のどの題材にも通じる面白さである。自由記述でも、言葉の知識を学ぶ面白さに触れている生徒がいる。漢文学習に、自分の生活につながる言葉の学習としての意義を認めた結果の記述と言える。この体験は漢文学習を大切だと思ふ意識につなげていくことができると考える。

事前、事後のアンケートで、「漢文(史記)の勉強は面白いと思うか」という質問に肯定的回答をする生徒の多くは「漢文の勉強は大切だと思うか」という質問にも肯定的な回答をしている。授業の面白さを継続していくことで、漢文の勉強が面白い、漢文の勉強は大切だという意識を育てていくことができると考える。

ウ 漢文学習の意欲の高まりへ

アンケートでは、漢文の勉強についての自由記述欄を設けた。事前アンケートで記述をしたのは27人であったが、そのうち48.1%が「漢文は難しい」、「勉強の仕方が分からない」、「勉強する意義が分からない」という否定的な内容であった。事後アンケートでは記述をした32人の中で、同じような否定的内容の記述は31.3%に減った。さらに、漢文学習の面白さや意義、意欲に言及した記述が53.1%あった。

「意欲」や「面白さ」に触れた記述は、句形を覚えようとか、丁寧な読みをしようという具体的な内容を伴っている。これまで漠然としていた漢文学習に、具体的な目標を持つことができ、「句形とかを覚えれば、文の意味もよく分かるようになると思う」、「これからも丁寧に理解できるように勉強法を変えてみよう」、「他の漢文も読めるようになりたい」などという意欲の高まりにつなげることができたと考える。

(3) 読む力について

ア 読解テストから

漢文を読むためには、語句や文法の学習が必要である。授業の前後に行った読解テストの平均点は、事前事後とも50点中32.6点と、差は見られなかったが、解答内容を見ると、それぞれの問題に含まれる反語や使役の句形に留意して訳している生徒が、事前では12人だったが、事後では24人になった。この24人の平均点は、事前が36.6点、事後が39.8点であるが、事後テストの解答では、句形にかかわる部分以外でも、字句の意味を考えて丁寧に解答しようとしている様子が見えた。漢文学習の中で文法事項に留意する意識を持ったことが、読む力の向上につながったと考えられる。

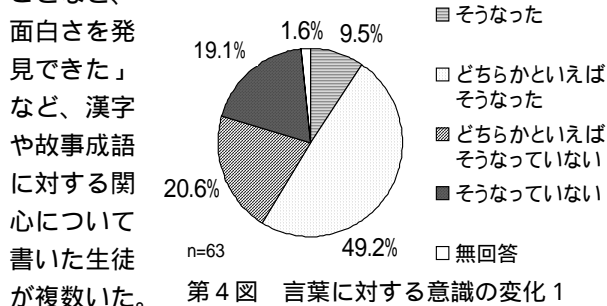
イ 読解ワークシートから

第4時に提出された37人の読解ワークシートの観点別評価の結果、「読む能力」では17人がA評価となった。この17人の読解テストの平均は、事前が35.1点、事後が37.5点であったが、17人のうち、「関心・意欲・態度」にもA評価の付いた4人の平均を見ると、事前の30.8点が事後には42.2点になっている。「関心・意

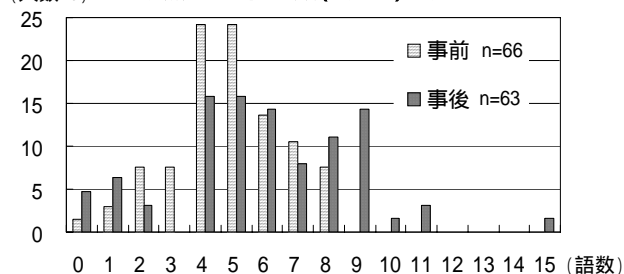
欲・態度」においてB評価であった13人の平均が、事前で36.4点、事後で36.0点であったことも考え合わせると、少ない人数ではあるが、意欲を持って学習に取り組む、丁寧に文章を読むことで、読む力を伸ばすことができた例であると見ることができる。

(4)言葉に対する意識の変化について

事後アンケートで、言語に対する意識の変化を尋ねるために、「ふだんの生活の中で知らない漢字や言葉に気を付けるようになったか」という質問をしたところ、58.7% (37人)の生徒が肯定的回答をした(第4図)。また、制限時間内で四字熟語を書く所での回答語数を見ると、事前では最高8語であったが、事後では8語以上書いた生徒が31.7% (20人)いた(第5図)。最高15語を書いた生徒は、授業で興味を持った点について、「登場人物の心情、故事成語の意味や起源」と自由記述欄に書いている。他にも「漢字一字が違うだけで、意味が違うことなど、



(人数%) 「四字熟語」回答語数(1分間)の分布



言語感覚を磨き、豊かにしていくためには、まず生徒が言語に対して関心を持ち、日常生活の中でも気を付けていこうとする意識を持つことが必要である。今回の授業を通して、漢文学習に言語の学習としての意義を認め、その大切さを認識したことで、日常生活の中での言葉や漢字に対する意識を高めることができたと考えられる。

4 研究のまとめ

(1)研究の成果

漢文を、生活の中で役に立つ、身近なもの意識させることにより、漢文学習の意欲を高める指導の工夫を探ってきた。前述のように、本研究の4点の工夫により、漢文を自分の生活につながる言語の学習として

認識させることで関心・意欲を持たせ、また、これまで何をしてよいか分からず、漠然としていた漢文学習に、具体的な取組の目標を持たせることができた。以上のことから指導の工夫の有効性と共に仮説の正しさが検証できたといえる。

(2)今後の課題

今回の授業を通して、考えを深めていく段階での生徒同士の話し合いの有用性を再認識した。生徒は、自分の意見を持って話し合いをし、その後にもう一度自分で考えてみるという段階を踏むことで、考えを深め、広げていく。しかし、今回、第4時の試験問題を作る話し合いでは十分な時間が取れなかった。

生徒に試験問題を作らせた場合、作った問題や解答には訂正が必要となる場合もあり得る。そういう部分の指導も含めて、作問の後、各班の問題や解答を自分たちのものと比べたり、評価し合ったりするような場を設定できれば、生徒の考えを深めるのに、より有効であったと考える。

おわりに

今回の研究では、漢文が生活につながるものであることを理解することで意欲が高まり、意欲を持って学習に取り組むことで、読む力が向上し、達成感や面白さを味わうという連鎖を作ることができた。言語感覚を磨き、読む力を伸ばすためには、この読む力の向上や達成感が、更なる意欲を喚起し、連鎖がスパイラル状につながっていくことが必要である。

漢文には、詩文、史伝、思想など様々な分野があるが、唐詩の詩句や論語の言葉など、現代の生活の中で何気なく使われる言葉はたくさんある。これからも、そのような言葉を手がかりに、生徒の生活につながる切り口を見付け、生徒が漢文学習の大切さを実感でき、漢文に興味を持てるような授業を追究し、意欲、学習活動、学力向上のスパイラルを高めて、確かな学力の育成につなげていくよう努めていきたい。

引用文献

市川伸一 2001 『学ぶ意欲の心理学』 PHP 研究所 p.98

参考文献

国立教育政策研究所 2007 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析及改善点(国語・国語総合)」 http://www.nier.go.jp/kaihatu/katei_h17_h/h17_h/05001011540004000.pdf (2007.4.24 取得)

文部省 2000 『高等学校学習指導要領解説 国語編(平成11年12月)』 東洋館出版社

島田昌幸 1973 「学習意欲」(下中邦彦『新教育の辞典』平凡社) pp.76-77